

Title	脱亜論と歴史研究：田中萃一郎「慶應義塾と史学の研究」の解説にかえて
Sub Title	Keio-Gijuku and the study of history
Author	佐藤, 正幸(Sato, Masayuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1977
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.1 (1977. 1) ,p.13- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文 目次のタイトル：慶應義塾と史学の研究
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19770100-0013">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19770100-0013</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 脱亜論と歴史研究

— 田中萃一郎「慶応義塾と史学の研究」の解説にかえて —

佐藤正幸

## はじめに

昨年秋、三田史学会はその創設者である田中萃一郎教授

の遺稿を教授の長男である田中和雄氏（静岡県函南町長）

より寄贈された。この遺稿は東邦史、政治学史等々の講義

ノート、十数篇の原稿、数多くの筆写本、及び数篇の翻訳

草稿を含み、教授の学問内容を知る上で、又近代日本史学

史研究の上で貴重な史料である。その細目は整理の終り次

第報告する予定であるが、その中に「慶応義塾と史学の研

究」と題する第一回三田史学会開会講演の草稿が含まれて

いる。この講演は今迄印行の機会を得なかったものである

が、慶応義塾史学科創設の趣旨、経緯について述べたもの

であって、三田史学会にとっては最も重要な講演であると思われるので、ここに若干の解説を付して本稿を紹介したいと思う。

## I

慶応義塾史学科の創設者であり、同時に三田史学会の産みの親でもある田中萃一郎（明治六年—大正十二年）はその五十年に亙る生涯を通じて歴史学に限りなき愛着と共感とを抱き続けた人物であった。われわれが現在目にするところが出来るのは既にドーソン著「蒙古史」の翻訳だけとなつてしまつたが、以前に刊行された「田中萃一郎史学論文集」（三田史学会、昭和七年）にはその主要な論文のほとん

どが採録されており、今日なおわれわれを驚歎させてやまない鋭い分析と視点とが随所に鏤められていて、近代日本の歴史学の勇躍たる息吹きを現在に伝えてくれている。

田中は近世史、政治史等に造詣が深かったが、それ以上に生涯彼を捉えて離さなかった問題は「歴史学とは何か」という問いであった。いつの世でもこの問いはともすれば哲学的思弁に向う性質を持っている様であるが、田中はこの問いを事実的經驗的に解明することに最も力を注いでいた様である。和・漢・洋に互る該博な知識を援用しつつこの問題を追求した田中の成果は「劉知幾の歴史研究法」、「王鳴盛の史学」、「Emil Reich 氏の史学研究法」、「史学の性質及び任務」、「支那学研究法上の一特色」、「希臘の大史家」、「史学研究法講義ノート」(未刊)となつて世に問われているが、ここに紹介する一篇は未刊の講演草稿であり、田中の歴史学の一面を伺わせてくれると同時に近代日本の歴史研究の形成過程をも解き明かしてくれる貴重な遺稿である。

「慶応義塾と史学の研究」と題するこの草稿は明治四十

三年六月十八日開催された三田史学会第一回講演大会の開會講演として読まれたものである。慶応義塾は同年四月に史学科を創設し、本格的な歴史研究のスタートを切ったばかりであった。その出発に際し慶応義塾に史学科が設置されたことの経緯について、又そこで目標とする歴史研究はどの様なものかについて語るのは史学科開設の中心となつた田中に課された責務であり、又同時にその最適任者でもあった。

史学科開設に至るまでの慶応義塾の歴史研究の経緯についてはこの草稿の中で詳細に述べられているので、以下では田中の歴史に対する態度、及びその依つて立つ背景などを指摘しつつ二つの視点から若干の解説を試みたいと思ふ。

## II

近代日本に於ける歴史学の形成と云う点からみると、この草稿の中で最も興味を引く論点のひとつは慶応義塾草創当時の洋学研究を近代日本に於ける学問発展上の「アンチ

・テーゼ」であると規定し、将来は学問の「ジン・テーゼ」を求めなければならないとしているところであろう。(二二頁)

田中が学んだ当時の慶応義塾の学問傾向は福沢諭吉の「脱亜論」に象徴される様に全くの西洋文化志向型であった。

……国中朝野の別なく一切万事西洋近時の文明を採り、独り日本の旧套を脱したるのみならず、亜細亞全洲の中に在て新一機軸を出し、主義とするところは唯脱亜の二字に在るのみ。(福沢諭吉 脱亜論)

まさにこの脱亜論的状况を学問の世界で実践したのが慶応義塾であった。

田中はこの草稿の中で「慶応義塾新議」を通して西洋学一本槍の教科内容を紹介し、併せて漢学がむしろ感情的なまでに排斥されていた状況を語り、次で明治十九年より漢学が予科の教授科目に入ってきた経緯を述べたあとで次の様な解釈を示している。

ヘーゲルの弁証法の術語で云えば皇漢学の論断に対する

反断として慶応義塾の洋学が起つたのであって、漢学は一時は全く排斥せられたが、併し臆て論断と反断とを総合して一方に偏せぬ真の学問を樹つるの必要から夙に漢籍が再び講ぜらるることとなつたのである。(四頁)

田中の判断の当否は別として、この三段論法論議は注目に値する。と云うのはこの解釈は彼自身の歴史研究の内容を如実に反映したものである。

当時の近代的学問とはヨーロッパの学問と同義であり、歴史学の世界もまたその例外ではなかった。「大日本史」の継承を意図した太政官修史局が英国の歴史家ゼルフイ(G. G. Zerk)に史学概論書(*The Science of History*, 明治十二年)の書き下ろしを要請したことなど象徴的な事実であるように思われる。それは方法論において特に顕著であったが、そのような状況の下で田中は中国史学の再評価を行いつつ、西洋史学との比較検討の上に日本の近代史学の将来を見ていたようである。一体このような歴史学に対する態度は何処から出て来たのであろうか。

田中が歴史研究の方法、史学史といった問題に深い関心

を払っていたことは先に述べた。これは彼が中国における歴史方法論、史学史、つまり史評類の冒頭に掲げられる劉知幾の「史通」に早くから関心を注いだことにも伺うことが出来る。史学史、史学方法論に関心を持つ者がこの書に関心を持つのは至極当然のように思えるのだが、実はその背後にはこの書物を正面から取り扱うことが出来るまで当時の歴史研究が成熟していたのであり、又同時に変化を遂げてきたと云う事実が指摘されねばならない。八世紀に書かれたこの史学理論書は長い間その本旨を読みとられることの少なかつた書物である。それは劉知幾の過度な批判精神、つまり「侮聖」に在るのであるが、それを受け入れる側の知識のあり方にもよる。享和三年に出版された猪飼敬所の「補修史通点煩」をみても、この表題の示す通りそこで取り扱われているのは史通点煩篇という煩文に関する章だけである。そこに見られるのは修辞学的関心でしかなく、史通が本来意図した歴史批評への言及は見られない。確かにそこには猪飼敬所個人の関心もあるであろうが、彼の養嗣彦續の編んだ伝記「於多満幾」を見る限りでは、そ

の書に対する当時の歴史家の反応が文章削正にのみあったことが伺える。(「於多満幾」卷三、四十三歳の項)

明治三十六年に書かれた田中の「劉知幾の歴史研究法」と題する論文は日本で歴史方法論、史学史研究に本格的に取り組んだ嚆矢のひとつであろう。そこでの分析方法から伺うことが出来るのは、田中が史通を正面切って取り扱ったのはドイツ史学、就中ドロイゼン、ベルンハイム等の史学理論書の存在が大きな力を持っていたと思われる。同じ課題を取り扱いつつ、同時に全く異質の方法を持つ歴史研究の存在に対する田中の深い理解と関心がこのことを可能にしたと云える。

田中はこの論文の中で史通とドロイゼンの史学理論との比較を試みているが、その直載的比較の当否は別として、比較歴史学的視点から見れば史通にはそこから汲み取るべき多くの宝が隠されていることに彼は注目した様である。史料選択、価値判断、客観的認識、因果性と云った、「歴史とは何か」と云う問題がわれわれの脳裡を掠める時に浮ぶほとんどの問題はひとたび西洋史学的な眼で見直せば、

史通の諸篇の中から鮮かに浮び上つて来る。歴史認識に関する限り中国史学の理論は無視することの出来ぬ存在であった。以後田中は西洋近代史学理論の紹介と共に、精力的に中国史学理論の研究にも力を注ぐのである。

田中が「対象としての中国史」以上に「認識方法としての中国史学」に関心を注いだことは「雪橋詩話を読み」と云う副題のもとに大正十年山口高商雑誌に掲載された「支那学研究法上の一特色」と云う論文にはっきりと現われている。そこでは専門細分化と云う近代史学の宿命を既に見通しつつ、楊鍾義が「雪橋詩話」の中で採用した詩話と云う歴史記述形式の分析を通してその解決の路を模索している。そこでは単なる比較と云う段階を超えて、歴史学に於ける分析と総合と云った歴史学の機能についての示唆すら行われているのである。

このような基本的歴史認識の取り扱ひから歴史研究を始めようとした田中は、これを慶応義塾の史学科に求めたようである。これは当時から一部の人々の間では高い評価が与えられていた様で、例えば内藤湖南が非常な関心を持つ

てこの田中の学風を見守っていたことを神田喜一郎氏は内藤湖南全集第十一巻の月報に書かれている。

これまで日本に於ける近代史学の形成と云う問題は西洋史学、就中ドイツ史学の導入をもって始まったとされ、それまで十数世紀に亘って続いた中国史学の影響については一顧だにされぬのが常であった。当時の歴史家の多くが新たなレールに乗り替えたのは確かであるが、彼らのほとんどがその知的形成期においては漢学の下に育つて来たのも事実である。あれだけの短期間に彼らが西洋史学を受け入れることが出来たのは、それを可能にした基盤が既に準備されていたからに他ならない。この講演草稿に限って云えば、政治経済学に対する歴史学の関係を経学と史学とのアナロジーで説明しようとする姿勢などは実に自然のことだったわけである。近代日本史学史の研究はまだ緒に就いたばかりである。政治、経済、社会の構造的変化を考慮に入れるのはもちろんであるが、次第に主流となる西洋史学ばかりでなく、その底流とも云うべき中国史学の存在にも関心を払わぬ限り近代日本の歴史認識の問題は解決出来ぬこ

とを田中は自ら証明してくれているのではないだろうか。

### III

次に興味を引く論点は啓蒙主義と歴史研究の関係について触れたところであろう。当時迄の慶応義塾の学問傾向がヨーロッパ学一辺倒であったことは屢々指摘される通りである。確かに啓蒙主義思想、別の言葉を借りれば合理的思想は既して非歴史的傾向を持つ様である。田中は慶応義塾で歴史研究の盛んにならなかつた原因として、啓蒙主義を全面的に受け入れることを可能にした慶応義塾の学問体質を指摘しつつ、啓蒙主義の持つ非歴史的な性格の分析を行う。

ヨーロッパでの啓蒙主義は宗教の権威からの解放を願うあまり主観主義的、個人主義的傾向が過度に前面に押し出され、そのため過去をも自らの規準で解釈してしまい、従って歴史認識と云う要素が希薄となつてしまつた。ちょうど折しも慶応義塾が専らとした洋学がその啓蒙主義であり内容的に旧来の皇漢学からの解放を目指した慶応義塾の姿

勢と軌を一にしていた。

東洋古来の制度文物は顧みるに足らずと確信して居つたところ、更に歴史を蔑視せる啓蒙主義、唯利主義、天則主義の学説を読んで益しその所信を深くしたのは怪むに足らぬことで、……(五頁)

かくの如く歴史を蔑視した啓蒙主義、唯理主義、実利主義、天則主義の行はれた慶応義塾に於て史学の研究の起らなかつたことは固より怪むことを要せぬ。(八頁)

しかし、このような指摘と同時に田中はもう一步踏み込んで次の様な指摘を行う。

蓋し漢学専攻時代の經学に相当せる政治經濟学の学理的  
研究は是非共史学の之に対立することが必要なので、  
歐洲に於て史学の研究勃興せるは決して昨今のことでない。  
而して淵源は啓蒙主義の最盛期に於て之を認め得る  
のである。(八頁)

田中はエドモンド・パークの「仏国革命論」、フンボルトの

「仏国憲法論」、サヴィニーの「中古羅馬法史」、メーンの「古代法講義」、F・リストの「国民経済学」、グロートの「希臘史」を紹介しつつ、彼らが既に歴史的研究の必要不可欠なことを論じていたと指摘する。

この問題に関心を持たせたのは何であったか。それは明治四十年代、田中がヨーロッパに学んだ当時に開始された歴史研究の動きの様であった。田中が注目したのは「歴史的综合雑誌」(Revue de Synthèse Historique)を中心にした、それ迄の歴史研究に対する反省から起った歴史の理論的問題であった。この雑誌は後に「人類の進化」叢書の企画者として著名なアンリ・ベル(Henri Berr)によって一九〇〇年(明治三十三年)に創刊された雑誌である。彼は今日でこそL・フェーブル、マルク・ブロックを生み出したフランス史学の雄として評価されているが、当時は全く無視され続けた歴史理論家であった。当時史料の山に埋没して自らの仕事の位置づけを持たぬ歴史家を前にして、彼は歴史学の暗然たる未来を憂慮し、同時にデュルケームに代表される社会学―歴史家が忘れていた哲学的綜合

という問題にまさに社会学者は取り組んでいるのだと彼は考えた―の目覚ましい台頭ぶりに刺激されつつ、人間科学としての歴史学の再生に希望をかけて、この歴史的综合雑誌をその足場とすべく刊行した。これを舞台に彼は史学史に、歴史理論に、歴史教育に、又歴史学と他と経験科学との関係に筆を振ったのであるが、この運動には当時ドイツで一人孤高を保っていたK・ランプレヒトも参加し、当時のヨーロッパ史学界の歴史の理論的研究の中心となっていたようである。

田中の歴史研究に対する姿勢からして、この歴史学の運動に彼が関心を寄せたのは十分納得出来る。彼が当時各地の図書館で手写蒐集したノートその中でも日本の歴史家に多大の寄与をしたのはゴルドン文書の手写である―の多くは現在散逸してしまっているが、ここに紹介している講演草稿と共に残っている手写ノートのひとつに、G・モンドの「十六世紀以降のフランス史学の進歩について」と題された長篇の論文の筆写があるが、これは啓蒙期に近代史学の萌芽を探し求めた最も初期の研究でもある。



田中がアンリ・ベル等に代表される歴史研究の流れの中で、G・モノド等の研究を手掛りにしてヨーロッパ史学の成立に関して研究を進めて行こうとした様子は彼の他の論文からも伺うことが出来る。啓蒙主義の絶頂期に歴史研究の萌芽を見ようとした田中は、彼の従来の方法から推して史通とか文史通義に相当するような仕事を手掛りに歴史研究の歴史を追求したかったのではないかと筆者は想像するのであるが、残念なことに当時はそこまで追求できる状況ではなかった様である。つまり、この問題の取り扱いとはりもおさず十九世紀ドイツ史学に相対的評価を下すことを含むのであって、その圧倒的影響下にあった当時としては困難であった様である。ちなみにヨーロッパでもこのよ  
うな史学史研究の方向は G. W. Sypher, G. Huppert, G. Fussner, J. Pocock 等の一連の研究にもみられるように最近十年程になってようやく軌道に乗った様である。ともあれ田中は、まさに中国型史学と西洋型史学の拮抗の上に成立しつつあった日本の近代史学の依って立つ基盤のひとつを明確にしたかったように筆者には思えてならない。

### おわりに

劉知幾が「史通」の中でわざわざ一篇を設けて力説したように、時の流れにまかせずに事実をありのままに書くという問題は古来より歴史記述についてまわるもののようにある。この問題に歴史家は頭を悩まし続け、或いはこれを考証学という方法で、又実証史学という名で乗り切ろうとしたこともあった。しかしどこまでいってもこの問題は歴史家にはついてまわるようである。

……慶応義塾が独立の学問の府たることは、得て権威の束縛を受け易い史学の研究上大に便宜を有して居る。

(一二頁)

この講演が行われた当時、東京の帝国大学文科大学には既に史学科と国史学科が設置されており、明治四十年には京都の帝国大学文科大学に、又翌明治四十一年には早稲田大学にそれぞれ史学科が設置された。アカデミズムの中で歴史研究が独立しはじめたこの時期に他大学に互して慶応

義塾の中に史学科を設けることの意義についてこの一節は

日本の歴史学のひとつの頂でもあった。

ど雄弁に語るものはない。田中のたったこれだけの言及は当時の歴史家を悩ませた様々な事件を考え併せると、又彼の歴史研究の態度と照らした場合、大きな重みをもってわれわれに迫ってくる。

尚、田中萃一郎の史学概念については拙稿「田中萃一郎博士の史学概論について」(東方学第五十四輯予定)を参照されたい。

歴史学とはこういうものだという定義など存在しない。人間の行為としての歴史は、あらゆる側面から光を当てられねばならない。われわれの知識が増大すると共にそこには様々な分析方法が生まれてくるはずである。それらに対して常に門戸を開きつつ行われるのが歴史研究である。

当時貴族院書記官長の職を辞して民俗学研究に打ち込み沖縄調査をして帰国した柳田国男を暖かく迎え、アカデミズムの世界から無視され続けていた彼の研究を高く評価しその発表の場を提供したのは田中萃一郎にほかならなかったものである。

民俗学研究の中にある歴史的要素を鋭く見抜き、そこに歴史研究のひとつのあり方を読みとった田中の歴史学は、既に脱亜論を超えて、近代史学の未来を求める明治後半の